全　国　大　会　報　告

第９０回　全国高等学校ラグビーフットボール大会

お礼のご挨拶

この度は札幌山の手高校ラグビー部の花園出場に際しまして、多数の同窓生、学校関係者、ラグビー関係者、並びに地域の皆様から暖かい励ましと多大なるご芳志を頂きました。ここに心よりお礼を申し上げます。本校ラグビー部が１１年連続で花園に出場することが出来ましたのも、皆様からご支援を頂いた賜と感謝いたします。

１回戦は沖縄県代表・名護高校と対戦、３８対７で勝利し４年連続の初戦突破を果たしました。２回戦は茨城県代表・常総学院高校との対戦となりました。県大会決勝で名門・茗渓学園を１点差で下した強豪校を相手に、再三激しいタックルを見舞い、一進一退の攻防を繰り広げました。しかし３点を追う後半残り３分、こぼれ球を右隅にトライされ万事休すとなりました。負けはしましたが最後まで接戦を演じた選手達には、多くの称賛と励ましのお言葉が寄せられました。

現在新チームは先輩達が残した足跡を胸に刻み、一致団結して練習に取り組んでいます。

最後に、ご支援を賜りました全ての方々に深く感謝を申し上げます。そして今後更なるご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、お礼のご挨拶といたします。

札幌山の手高等学校　校長　　西岡　憲廣
札幌山の手高校ラグビー部後援協賛会　会長　　菅生　春彦

試合結果

▽１回戦　　１２月２７日　花園第Ⅰグラウンド

札幌山の手（南北海道）　３８　－　７　名護（沖縄）

４	トライ	０
３	ゴール	０
０	PG	０
２６	前半	０
２	トライ	１
１	ゴール	１
０	PG	０
１２	後半	７
３８	合計	７

札幌山の手は序盤から出足の早いディフェンスでペースをつかみ、チャンスを確実にものにして得点を重ねた。

この試合では３年間地道な努力を続けてきたダラスが４トライを挙げ、大輪の花を咲かせた。

▽２回戦　　１２月３０日　花園第Ⅲグラウンド

札幌山の手　１９　－　２７　常総学院（茨城）

２	トライ	２
２	ゴール	１
０	PG	０
１４	前半	１２
１	トライ	３
０	ゴール	０
０	PG	０
５	後半	１５
１９	合計	２７

前半１０分に札幌山の手が先制トライをあげるも、１５分には追いつかれる。後半６分に逆転トライを許すも、直後の８分には再逆転のトライをあげて山の手が再びリードする。しかし１４分、２７分とトライを重ねた常総学院に軍配が上がった。

札幌山の手は前半26分、中央付近のラックから右へ展開し、FWダラス・タタナ選手（中央）がトライ＝近鉄花園ラグビー場で27日、和田大典撮影

平成 22 年 12 月 28 日　毎日新聞

接戦 終盤力尽きる

▽2回戦
札幌山の手 19－27 常総学院
27日、花園ラグビー場で

札幌山の手は前半10分、ラインアウトから右に展開、WTB浅野選手（3年）が相手を引きつけ、FB内野選手（左）＝近鉄花園ラグビー場で、和田大典撮影

平成 22 年 12 月 31 日　毎日新聞

平成２２年度　全国大会出場協賛金決算

収入の部

1. 寄付金	1,699,684
2. 父母会負担	4,570,000
3. 生徒会	3,484,500
合計	9,754,184

支出の部

1. １次合宿	1,336,906
2. ２次合宿	3,235,306
4. 本大会	4,094,891
5. 装具費	940,225
6. 事務費	77,712
7. その他	58,717
合計	9,743,757

収支差引額　１０，４２７　円

この度はラグビー部の全国大会出場にあたり、数百名の方々から心温まるご支援をたまわり、有り難うございました。今後とも、本校ラグビー部へのご支援とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。残金につきましては、次年度の強化費として使わせて頂きます。

事務局長　藤井　栄人

花園観戦記

札幌山の手高校ラグビー部父母会会長　丹野　政則

近鉄花園ラグビー場で 12 月 27 日より開催される第 90 回全国高校ラグビーフットボール大会の前日、父母応援団は北海道から大阪に各自それぞれ移動しました。夕方には「近鉄今里駅」周辺で、理事長先生をはじめ監督・コーチ・龍谷大のﾄﾚｰﾅｰ・リコーOB の臨時コーチ・応援に来ている父母の皆様と結束を再確認、明日の勝利を確信し上機嫌でその場を後にしました。

12 月 27 日（月）会場は青空が広がるラグビー日和。10 時からは開会式を観ました。今日の試合に備えて筋肉を冷やさない為、秘策「ﾊﾞﾝﾃｨｰｽﾄｯｷﾝｸﾞ作戦」で挑んだ山の手高校は、北海道の優勝旗を先頭に、しっかり全員が腕と脚を振り上げ胸を張り堂々の入場行進でした。

今日の 1 回戦の対戦相手は、沖縄県代表の『名護』。6 月の全九州大会ではベスト 4 に進出しているチームです。トップリーガーも数人輩出している名門です。

試合開始直前には総勢 50 名の『山の手』応援団が、バックスタンドに OB 会寄贈の横断幕を掲げて陣取り、お揃いの山の手ブルーのジャンパー姿で臨戦態勢に入りました。相手の『名護』の応援団も、指笛や太鼓を鳴らす郷土色豊かな応援団で、こちらも賑やかに臨戦態勢です。

13 時 15 分キックオフ。その直後、『山の手』応援団の間に驚きが広がります。全く別のチームに急成長していたからです。低く突き刺さる気合いの具現としてのタックル。ブレイクダウンもコンタクトも、15 人が一つの肉塊となって戦っています。監督の言った「みんなに感動を与える試合をしよう」を、選手達が自分の全てを出し切って具現化しているのです。そして前半 10 分に先制した後も 5 トライを重ねて圧倒。終了直前にトライを許すも、終わってみれば 38－7 の大勝でした。これで山の手は 4 年連続で初戦突破を果たしました。北海道勢としては昭和 31 年に達成した北見北斗の 8 年連続に次ぐ記録達成だそうです。

12 月 30 日（木）会場は朝から冷たい雨。第 3 グラウンドで行われる 2 回戦の相手は、茨城県代表の『常総学院』。春の全国選抜大会で A シード校の「大阪朝鮮」に 7 対 10 と接戦を演じている強豪校です。雨の中選手達のアップを見学。タックル練習ではその気迫に多くの地元ファンから熱い眼差し。11 年連続出場し花園で 7 勝を重ねた事の重みを実感し OB に感謝です。

第 3ｸﾞﾗｳﾝﾄﾞでの『山の手』応援団は総勢 25 名。『名護』の 3 年生も応援してくれ、『常総学院』の大応援団には中身で負けていません。すでに元旦まで滞在する段取りをしており、勝利を信じて声を枯らします。（名護のラガーマンありがとう！）

14:00 キックオフ。立ち上がりからタックルまたタックルで攻撃を食い止めます。思わず「君達はそんなにもタックルを愛しているのか」と唸ってしまいます。そして前半 10 分に先制。応援団は総立ちでトランス状態に突入します。その後めまぐるしく攻守が切り替わるシーソーゲームを展開、前半を 14 対 12 でリードして折り返します。「2 回戦突破はいける」との感触充分です。後半も選手達は、仲間を裏切ってはならぬと起き上がり、駆け出しては穴を埋めて倒し、抜かれても追いすがる一進一退の攻防が続きます。半泣きになりながら「なんてタフな子達なのだ」とただ感心するばかり。しかし 14 分と 27 分に失点、そしてついにノーサイドの笛。「接戦」「激戦」「惜敗」。お互いのプロップ同士が泣きながら抱き合っています。試合直後に選手達がスタンドへ挨拶に来ましたが、「ありがとう」の感謝の声があちこちからあがります。負けはしましたが、不思議と爽やかな心地よい風が流れている気がしました。それは選手達がここまで、多くの熱き男達に見返りを求めぬ愛情を注がれ、高い目標を定め、その過程の困難を知性と肉体の鍛錬で解決し、真剣勝負に深い感動を知ったからなのだろうかと・・・。この 3 年間の「素人軍団」の軌跡は、「ラグビー」がやらなきゃ損をするスポーツである事、タフなハートと体、そしてタックル好き、仲間との絆や友情があれば強くなれる事を実証しました。がんばれ後輩たち！

応援団はその日の夜、「山の手ファン」のお好み焼き屋さんの御厚意で、監督・コーチ・龍谷大のﾄﾚｰﾅｰ・新 1 年生の家族の皆さん・マスコミ関係者・残った父母の皆様とで、『山の手』の選手のその素晴らしきラガーマンぶりを称え、熱く語り明かしました。

翌日大阪の地で年越しを済ませ、元旦には選手達が居たであろう花園での試合を観戦し、「いつかここに来ることがあるのだろうか」との寂しい思いを抱きつつ、雪の我がふる里へと大阪を後にしました。

遠征メンバー

学年	氏名	ポジション	身長	体重	学年	氏名	ポジション	身長	体重	学年	氏名	ポジション	身長	体重
3	梅田　健太	ＰＲ	168	110	3	浅沼　昌熙	WTB	173	76	2	芝木　天馬	ＦＢ	177	77
3	遠藤　雄太	ＰＲ	175	87	3	操上　和弘	WTB	170	66	1	渡邊　隆之	ＰＲ	182	107
3	田中　憂弥	ＨＯ	173	80	3	乾　　天平	WTB	168	57	1	相馬　健祐	ＨＯ	173	78
3	君嶋　航平	ＬＯ	177	72	2	間ヶ敷　拓磨	ＰＲ	167	90	1	山崎　貴志	ＬＯ	183	98
3	板垣　翔太	ＬＯ	182	88	2	佐藤　諒太	ＨＯ	174	85	1	古川　龍雅	ＬＯ	180	74
3	瀧澤　健太	ＬＯ	189	97	2	長井　洸太	ＬＯ	182	76	1	田邊　貴飛	ＦＬ	175	83
3	宮坂　京介	ＦＬ	170	74	2	栁山　拓己	No. 8	175	72	1	ｼﾞｮｰﾃﾞｨﾝ・ﾊﾟｰﾄﾞﾝ	ＦＬ	183	85
3	ﾀﾞﾗｽ・ﾀﾀﾅ	ＦＬ	187	92	2	寺下　将史	ＳＨ	160	55	1	浅野　祥平	ＳＨ	165	64
3	中村　友大	ＳＨ	161	55	2	藤野　秀平	ＳＯ	171	62	1	先谷 槙尚人	ＳＯ	175	63
3	斉藤　一心	ＳＯ	181	70	2	伊藤　優駿	CTB	166	77	1	西本　峻真	WTB	172	58
3	丹野　怜央	CTB	170	76	2	則川　義貴	WTB	168	59	2	田中　千賀	マネージャー		

新聞記事より

平成２３年１月３１日
札幌山の手高等学校
ラグビー部後援協賛会

スポーツ報知　2010年(平成22年) 12月31日(金曜日)　札幌新聞　(第三種郵便物認可)

追い付かれても逆転!!「最弱世代」粘り及ばず……ほっかいどう報知

札幌山の手・樋上(中)は、常盤学院のディフェンス陣に突進を阻まれる【切り込み写真】肩を落とし引き揚げるフィフティーン

激闘も散る

札幌山の手

入学時の経験者1人「素人集団」が成長/監督「褒めてやりたい」

2回戦を行われ、南北海道代表の札幌山の手は19―27で、常盤学院（茨城）に逆転負け。2回戦で姿を消した。前半を4―12とリードして前半を折り返したが、後半の相手の猛攻をしのぎきれなかった。ただ、追い付かれても逆転、逆転されるなど、最後まで粘りを信せたフィフティーン。「最弱世代」といって奮起を誓してきた佐藤幹夫監督（49）は、「良くやった、と褒めてやりたい」とねぎらっていた。

【2回戦】札幌山の手（北海道）12（7―14、5―13）27（19―0、8―27）常盤学院（茨城）

【女子バスケ部に続けず】

バスケットは28日にウインターカップを制し、3冠を達成した女子バスケ部に続く快進撃を期待された札幌山の手。強豪の常盤学院相手に粘りを見せたが、攻撃の末、2回戦で姿を消した。

前半10分、左ラインアウトから5人がパスをつないで、最後はチーム一の俊足を誇るWTB浅沼昌熙（3年）が右隅に先制トライ。「みんながつないでくれたから、最後は走るだけだった」。逆転を許した後の後半3分にも、浅沼が同じような形でうま味のトライを決めて再逆転。同14、27分と連続トライを許し敗れただけ、最後まで意地を見せた戦いだった。佐藤監督は、自陣から見た裏側の右ライドにある弱点を見抜いていた。指揮官の作戦を、選手たちはしっかりと遂行したと見せた。

入学時のラグビー経験者は、フランカーのグラス・タタナ（3年）1人だけという素人集団。部員を集手指揮官から「最弱世代」と呼ばれてきたが、その分、結束を強めてチームプレーに磨きをかけてきた。指揮官は「あと一歩だった。うまくはないけど、よく戦ってくれた」と、涙ぐんだ。

「3年間やってきたこと出し切りたかった。『最弱世代』といわれたけど、最後の仲間たちとラグビーができて、幸せだった」。浅沼は最後に笑顔で振り返っていた。

（白野　博幸）

母にトライの誕生日プレゼント

前日の29日にの○…浅沼は43歳の誕生日を迎えた母・博美さんへの約束通りトライを決めることを約束していた。年頃の男子には珍しく、「母さんとは仲良いですよ」と話す。この日は、母からもらったお守りをユニホームのパンツにしのばせ2トライ。「少しは恩返しできたかな」と笑顔だった。卒業後は流通経大で大学王者を目指す。

この仲間とプレーでき良かった

トライ

WTB 浅沼昌熙選手　札幌山の手・3年

相手陣の奥深くへと攻め込んだ前半10分。PB芋末天馬選手（2年）からパスを受けると、50メートル走4秒1とチームトップの足の速さを生かして相手を振り切った。先制トライに「持ち味のスピードを出せた」と振り返った。

中学時代は陸上部。足には自信があるという。だが、現在の3年生はグラス・タタナ選手以外は全員が同じように高校からラグビーを始めた選手ばかり。佐藤幹夫監督からは「史上最弱世代」と言われ続けてきたが、「そんなこと言わせない。花園で2回戦を突破し、先輩たちを超える」と、かえって負けず嫌いに火が付いた。

既に明すものもあった。1回戦の名護戦では、終了間際に自らのパスが相手に渡り、トライを奪われるきっかけになった。29日に43歳の誕生日を迎えた母博美さんに「勝利をプレゼントしたい」との思いもあった。チームは負けたものの、後半8分には二つ目のトライを挙げ、「少しは喜んでもらえるかな」とはにかんだ。

卒業後は流通経済大でラグビーを続ける。「この仲間とプレーできて本当に良かった」と自信に満ちた笑顔を見せた。

【今井美津子】

平成２２年１２月３１日　毎日新聞

平成二十二年十二月三十一日　スポーツ報知

憧れの先輩超えを

トライ

グラス・タタナ選手　札幌山の手・3年

前半15分からわずか11分間に3連続トライ。187センチ、92キロの体格を生かした突破力で会場を沸かせると、後半25分には相手パスを奪って約70メートルを独走。この日、四つ目のトライを挙げた。

札幌山の手が無着に行うニュージーランド合宿で、対戦する現地の高校に在籍していたことから08年6月に来日。同じニュージーランド出身で、札幌山の手で活躍していた旭日本代表のマイケル・リーチ選手＝東海大＝らの存在が、留学を決意させた。

来日当初は「体は大きいが、筋肉はほとんどなかった」（佐藤幹夫監督）という。変化が表れたのは3年になってから。最上級生の自覚から、日々の練習後にも筋力トレーニングに取り組み、佐藤監督が「体つきが全然違う」と驚くほどに。円野伸央主将も「努力を続けることができる。日本人の魂を持っている」と話す。

次はリーチ選手にも負けられなかった2回戦。「（リーチ選手のように）魂をサポートできるように頑張りたい」。この日、試合前にメールで激励してくれた、憧れの先輩の期待に応えるつもりだ。

【今井美津子】

平成二十二年十二月二十八日　毎日新聞